

「3対89」の意味するもの。 長嶋茂雄 vs. 王貞治

Shigeo Nagashima vs. Sadaharu Oh
Intention which two numbers indicate

Baseball Final 2000

永谷脩=文

text by Osamu Nagatani

佐貴直哉=写真

photographs by Naoya Sanuki

杉山ヒデキ=写真

photograph by Hideki Sugiyama



「今の時代に連覇を果たすことがいかに難しいものか、我々はわかっているだけに、王監督には敬意を表したい。巨人の時代からON」というのは、特別なものがあるのです」

巨人・長嶋茂雄監督は、対戦相手にダイエー・王貞治監督が決まった時、こう言っていて歓迎の意を示した。そして、1カ月後の10月28日、4勝2敗でダイエーを制して、日本一に、巨人は輝いた。世間では長嶋が勝って、王が負けたという受け取られ方をすることだろう。「勝負の世界は、どちらかが勝って、どちらかが負ける、だからと言って、自分たちが築き上げてきたことが、崩れるわけではないのです。やるのは選手なのですから」

王監督はこう言って、シリーズ前から選手を前面に押し出すようにした。20世紀最後の日本シリーズに、ON対決を夢見ていたファンは多かった。巨人は多額の費用をつぎ込んで戦力を補強し、監督自らが背番号を「3」に戻して、チームの先頭に立つ決意を表した。長嶋監督はその背番号「3」をいつ見せるのか。今年の春季キャンプ、マスコミは長嶋監督を追いかけた。そんな動きを冷静に見つめていた王監督は、「背番号『3』を見せるか見せないかで大騒ぎが出来るなんて、日本は平和だなあ」と言い放ったのだ。そんな王監督に、「王監督は背番号を『1』にしなさいのですか」とたずねると、きっぱりと「ダイエーの監督としての背番号は『89』なんだよ」と答えた。

清原和博、松井秀喜、マルティネス、上原浩治などに加え、新戦力である江藤智、工藤公康、ダレル・メイなど、名だたるスター軍団をまとめるには、20世紀最大のスーパースターが持つカリス・マ性の象徴である背番号「3」の輝きが必要だったのかもしれない。一方の王監督は、常に手作りでのチーム編成を強いられた。昨年は永井智浩、星野順治、篠原貴行ら、2年目の投手を工藤公康（現巨人）や秋山幸二の優勝経験者が支えての優勝だった。だが、今年の優勝は、若手の成長に

目を向けながら、渡辺正和、吉田修司、長富浩志らベテランの中継ぎを頼りに、やりくりで綱んだ優勝だった。王監督は、自らの現役時代の偉業を知らない選手を使うには、選手たちのなかへ、自らが入って行って我慢するしかなかったのだ。だから、今シリーズは、背番号「3」と背番号「1」ではなく、「89」との戦いであると言った。

ダイエーは、昨年の日本シリーズの起爆剤となったベテランの秋山の一番起用が当然ながら予想されたが、これに頑として反対したのは、王監督自身であった。

「俺たちが勝って来たシーズン中の戦い方をするのが、選手を信頼することになるのではないか」と言って、一番柴原洋から始まり、

1936年2月20日千葉県佐倉市生まれ。佐倉一高から立大を経て、58年巨人入団。MVP5度など数多くタイトルを獲得。チャンスに強いその打撃が、ファンを魅了。球界最高のスターと呼ばれる。74年に現役引退。翌年から80年、93年から現在まで巨人監督を務め、5度のリーグ優勝、94年にチームを日本一に導き、今年2度目の日本一を達成。監督成績は、1842試合959勝826敗57分、勝率5割3分7厘

大道典良、小久保裕紀、松中信彦でクリーンナップを形成するオーダーを組んだのであった。ただ、DHのない緒戦は、二番村松有人に代えて、鳥越裕介を入れただけなのだ。

第1戦、1対3でダイエーがリードされている5回、ここまでを3点に抑えた先発・若田部健一をあっさり交代させ、渡辺正、田之上慶三郎、吉田とつないでいった。2桁勝利を挙げている先発投手が2人いる巨人投手陣では、3失点での交代は勇気のいることなのだ。王監督は平然と代えて、打線の反撃を待ったのだ。

「他からどう思われようが、これがうちのパターンなんです。シーズンと同じ戦い方をしているだけです」と言い切った。それは、巨人という巨大戦力に対して、「いつもどおりの戦いをすれば、対等に戦える」という監督の意識の表れだったのではないか。「奇襲とか変化とかは、弱いチームのやること。少なくとも、うちは昨年の日本一のチー

ムなんです」

4年ぶり優勝の巨人とは違って、昨年の日本シリーズ経験者らしい試合運びであった。

第2戦も、先発が降板すると中継ぎでしのごダイエーの勝ちパターンが続く。だが、王監督は自らのチームの綻びに、この時点で気づいていた。

「本来は、先発一完投という形が理想なんです。でもチームの事情でやりくりをしなければならぬのです。破綻は覚悟です」

それはシーズン2桁勝利を挙げた投手が一人もいない台所事情の厳しさを象徴していた。王監督は現役時代から理路整然と分析するそのバッティング理論には定評があった。選手を見るときの判断材料として、背筋がきちんと伸びているか、そして、構えたときに爪先加重になっているかを挙げていた。時として見られる早目の投手交代は、打者の目から見た危機判断によって導き出されたものではないだろうか。



Naoya Sanuki

一方、長嶋監督ほど、フィールディングを大事にする人も珍しい。そんな監督の感性が出たのは、第3戦であった。連敗直後の福岡ドーム、負けたら後がなくなる巨人は動いた。コーチ会議では、1、2戦に全く当たりの出ていなかった高橋由伸のスタメン落ちが進言されたが、長嶋監督の選択は高橋由伸ではなく江藤のスタメン落ちだった。日本シリーズ経験では同じような2人だが、高橋由伸の振りにはいいフィールディングを感じ、江藤の振りに勢いがないと感じたのかもしれないのだ。長嶋監督が現役時代によく言っていた言葉で、「自分が思い切りよくスイング出来るところが、ストライクゾーン」というのがあったが、監督自身の判断には、誰にも口出しできない感性が残されているのだ。その結果、「あの1本が出たことで気が楽になった」と高橋由伸が後で振り返る先制の2ランを全員3安打を放ち、第5戦でのホームランにもつながった。

「江藤でも、高橋由伸でもどちらでもいいと思うけれど、監督には我々にはわからない根拠があるのだからね」とバッテリー投手の一人は言う。そういうえば、レフトの守備がために第3、4戦は堀田一郎を使ったが、第5戦では、斎藤宜之に代えたのを見ても、監督だけが理解できるフィールディングが出ていたのではないだろうか。

変則日程で行なわれた今年の日本シリーズ。巨人は豊富な人材をパズルのように順序良く当てはめていけばよかったという。

「王藤、メイ、上原、斎藤雅樹は初めから決めて、言い渡していました。ただ、王手を掛けられていたとき以外は高橋尚成の第5戦も考えていたのです」と、投手起用について、長嶋監督はのちに吐露している。

一方のダイエーの先発は誰になるのか。同一チームと7試合も戦わなくてはいけない日本シリーズの場合、第2戦が終わった次の移動日が、戦前までに集めたデータと、戦ってみたいのスコアラー分析をすりよせる軌道修正の場になる。だが、今回のように、移動日な



Hideki Sugiyama

Shigeo Nagashima vs. Sadaharu Oh Intention which two numbers indicate

気で江藤をスタメンからはずせた巨人の選手層の厚さの違いが、連戦が続くにつれて如実に現れ、加えて、斎藤雅、高橋尚のようなパ・リーグにいないタイプの投手に初めて対戦する戸惑いが、バッテリーのリズムを狂わした。「戦力の分厚さ? それは最初からわかっている」と現役時代と同様に我慢強く、戦力差に愚痴を言わない王監督とは対照的に、長嶋監督は「打つべき人が打ってくれたからね」と、豊富な人材を上手に配置しての勝利に満足そのものだった。

それにしても、たたみかけたときの巨人・長嶋監督の采配はよく当たる。エンドランに盗塁とやりたい放題であった。一方のダイエーが走者を出したとき、突破口として盗塁を多用したのは、大きく異なっていた。

緒戦、榎原寛己復帰のシナリオを書き損なった長嶋監督。日本一を決めた第6戦で、平松一宏、岡島秀樹とさりげなくつないで、世代交代を図ろうとしていた。そして9回二死、王監督が、最後に出たいという小久保を制して、二エベスを送ったのは、彼の今後の選手生命を考えてのことであった。

「ON対決と騒がれていたけれど、当人同士はそんなに感じてはいないんだ。現役時の実績で言われる時代ではないからね」と言った王監督は、長嶋監督の持つ物量作戦の前に敗れ去った。いつの日か、長嶋の上に立つために、現役時代、数字の上で練磨した男には、過酷な結果になったような気がする。

終了後、背筋を伸ばして、表彰される長嶋監督に拍手を送った王監督は美しく、ペナントを手にする長嶋監督は輝いていた。

全ての表彰が終わる、誰に言われるでもなくライトスタンドに手を振りながら走って行った巨人ナイン、そして、それを見守る長嶋監督。そのとき、王監督はナインにこう言った。「その場でいいからレフトスタンドに手を振ろう」

何か2人のチーム作りを象徴する20世紀最後のエンディングだった。

1940年5月20日東京都墨田区生まれ。早実高で甲子園優勝投手となり、59年巨人に入団。2度の三冠王などに輝き、通算本塁打868本の世界記録を樹立。長嶋茂雄と共に巨人の黄金時代を築く。80年に引退後、84年から5年間巨人監督を務め、87年にリーグ優勝。95年にダイエー監督に就任し、昨年の日本一に続き、今年もリーグ制覇を果たす。監督成績は、1457試合、733勝672敗52分、勝率5割2分2厘

して第3戦まで消化した場合、1戦分、余計にデータ分析ができることになるのだ。そのため「できるだけデータの少ない投手を先発させたほうが有利。3度目の登板だが、結果を出している田之上の方を第4戦に先発させ、もし負けても若田部が残っているという形がいい」というコーチ会議の意見を監督は黙って聞いた。「シーズンから一緒に戦ってきた」

という仲間意識が、王監督に意見を採り入れさせたのではなかっただろうか。

第4戦は両先発投手のしごき合いとなった。ここで第3戦でスタメンをはずされ、「2日間の休みが自分を追い詰めて、開き直れた」という江藤が奮起し、その後の第4、5戦での本塁打にもつながった。長嶋監督が、第3戦で江藤をはずしたのが生きたのは、同じ三塁手としての目によるものだろう。

王監督が、小久保がわき腹をいためたときにしじみと言った言葉を思い出さず。「誰でも簡単にスタメンをはずせるのは羨ましいね。うちはやりくりするしかない。小久保に代わる戦力がいなかったダイエーの苦しさ、平